

# 鏡二題

長谷川時雨

青空文庫



## 暗い鏡

鏡といふものをちやんと見るやうになつたのは、十八——九の年頃だつたと思ひます。その前だとして見ましたが、鏡にうつる自分を——まだそのころだとして顔だけですが——見たといへませう。十七位の時分は寧ろ姿全體にうつるもの——すがたみ姿見鏡でなくつても、硝子戸なんぞでも氣まりが悪かつたので見ないふりをして、その癖誰も見るものがないとしげしげと見詰めたものです。どうも體のどこもが丸くなるのが——いしき尻などがきはだ極立つて格好が悪くなつて厭でした。

鏡といへば、子供のころ家に新舊二様の鏡があつて、どれを見ても心を暗くしたのを覚えてゐます。八十八の祖母は舊式でしたから箆笥のある部屋へ障子屏風をたてめぐらしてその中に鏡臺が飾つてあつて、鏡は丸い鋼かねの鏡——夏になるとよく磨師とぎしに磨かせてゐましたが、とにかく黒ずんだ、沈んだ顔が鏡の底の底の方に生氣なくうつるのでした。おまけに部屋が藏づくりでしたから、それに窓の青葉などに白い花でもついてゐる時は、妙に氣遠けとほいといふ心持ちがして、美しくいへば、流れに沈んだ晝の月を見るやうだとか、又は深い井戸の底にうつた顔のやうだとか形容も出來ませうが、その場合は狐つきぢやないかと自分の顔を悲しい凄こほいやうに眺めて、嫌な氣持ちがしたものでした。どうもあの銅かねの

鏡は髪の色でもなんでも生々いきいきとしたところがうつらないで陰氣です。そのかはりにまた、そのころの西洋鏡——硝子のときならば粗製品で、どれにうつして見ても顔が違つてゐるのです。顔が半分歪んでゐたり、しやくれて見えたり、滑稽な泣きつ面をしたり、ほんとに嫌になつてしまふのが多かつたので、そんなものは見たくないやうな氣がして——子供だからそれほど分はつきり明不快いやだとは思はなかつたかもしれないが、まあそんな覺えがあります。

姿見は中々よく見ました。疊半分以上の、そのころのものではよい品しながあつたので、それに息をかけて拭きながら種いろく々の表情をやりました。だが子供心に、妙なへだてをつけたもので、鏡は顔を見るものとしてで、姿見すがたみの前にくると別な氣分です。とい

ふのは、あたしは踊りが大好きだったので、お師匠さんなしの自由な踊りの稽古がたのしめたのです。いはばまあ、姿見が師匠なのでした。變なかたちをすると、「拙まづい」と叫ぶ、實まじに生きまじめなもので、その聲は自分の聲とはしないのでした。

そこで、おとなになつてからのあたしは鏡にこすい對しようをすることに覺えました。一個の鏡を二ツに役にたてる。ある折はあらゆる自分の缺點あらさがしをやります、醜みにさのかぎりを探りだします。それは顔面といふだけではなく、心にまで觸れてゐます。もつとも多く鏡の前で考へます、自分自身の悩みについて——それは深刻なものです。いつもいつもがさうであるとはいひませんが、はじめから自分を睨めるやうにむかふ時があれば、ふと髪を

解く手も忘れて、ブーツとなつてゐる時もあります。前の方の時は悪どく現實的なをりです、後の折はやや空想的です。前の場合には眼は殘酷な秋しうくわん官くわんです、なさけ用捨もなく毛筋ほどのおもねりもありません、氣孔けあなひとつにも泣きたいほどの厭さがあつて、とてもたまらない不快いやな存在です。ぶちこはしてしまふことも出ない粗製濫造品、自分だからといふので生かすつづけようとする矛盾さ——まあそんな疳癩ぼけです。

だが、またある折は化ぼけたつもりでだまかしておいて貰ひます。それではづかしげもなく人ひとなか中へも出ます。化粧といふのは他目ひとめを賺ごまかすのではなく自分の心を化しなだめるのです。具合のいいことに化けようとしてゐる心は、都合よく賺だまされることに努力しま

す。うぬぼれない自己満足——自分をだましてゐればよいで、なるべく手早く、痛いところに觸れない速力で髪も結ひます、化粧もします。

あたしは他人ひとに髪を結つてもらふのが大厭ひです。ひとつは潔癖からもくるのですが、凝と鏡を見詰めてゐる間が長くて耐へられなくなります。何時も美しいなあと思へて鏡にむかつたらば、鏡は愛らしくもあり、親しみもありませうが——我影を見る親しみはもちながら、なんとなく怖い氣がします。それは年齢としが更ふけてゆくといふ戦そののきばかりではありません。それらのことは面影に、鏡に見出すより早く氣づいて、却て驚いて鏡を見直すくらゐデリ力なものです。



女と鏡

ある折は、水をのんだコップにうつる生々いきくした愉快な顔——切き子の壺りこに種々な角度からうつるのも面白い。さし出された給仕盆おぼんにうつることもあり、水面みづにうつして妙な顔をして見ることもある。食べものを運ぶホークに、二本の筋のある断片的な鼻と口とがうつり、歯が光ることがある。それより面白いのは小さな匙しやくに、透明な液體とともに掬こびとひあげた小人の自分の顔。どれもあんまり美しいものではない。しかし、ものを書きつづけた夜の顔が、朝

の光りに、机や窓硝子にうつつた時のあじきなさは、シヨーウイ  
ンドに突然くたびれた全身を映照てらしだされたをりの物恥ものはぢと匹敵  
する。

私もよい鏡を持ちたいと思つた事もあつたが、それは趣味の時  
もあり、心の守りといふふうに思つたをりもある。今日の考へで  
は、脂粉のいらぬ年齢としになつても、正たゞしく恥ない日日を送るため  
に入用だと思つてゐる。我心の正邪を、はつきりと、心の窓の眼  
から覗くことが出来るのは、凡人には鏡が手近だから――

（「婦人公論」昭和十一年四月號）





# 青空文庫情報

底本：「桃」中央公論社

1939（昭和14）年2月10日発行

初出：暗い鏡「婦人公論」

1929（昭和4）年

女と鏡「婦人公論」

1936（昭和11）年4月号

入力：門田裕志

校正：仙酔<sup>あびす</sup>

2009年1月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 鏡二題

## 長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>